



平家物語卷第七

清水之冠主

經政所生時福

火打台我

本曾之形書

俱利伽羅落

實感之目取期

間玄助

本曾山門口牒快

山門之返牒

季子門首吉社連署書

自上之却落

間惟感之却一落

池之大西之却留事

經政之却一落

忠度之却落

福原之落

ありて討考あり 然野金峯山の僧等
南郡空願の大方住持なる法水社神人
示すやまて一向平家と崩く保良とを
そむりてうらそに倭舎の普作と
本曾と不岐の事ありて可成合戦と
そ實しし玄神の徳舎に普作の打殺
十万余ありて倭舎と立ちて越後國
舟上巻竹の本曾とて勝三子金峯當
國金田の城と立ちて越後と信濃に據り

然坂の陣とあり本曾普作の使去
と立ちて平の事件討人といひて所又
七夫とありと十萬餘人ありとありと
恨る子ありとありとありとありとありと
越くありとありとありとありとありとありと
ト人なりとありとありとありとありとありと
ていありとありとありとありとありとありと
是ありとありとありとありとありとありと
平家小笠原とありとありとありとありとありと

しん山陰乃ゆいあり捷しり少く不て来すを
皆しありたりて中任臣は國任人任者此
孤氏相模國の任人任者乃ゆい高京之
橋の判友長徳氏乃ゆい高京之國長
井の任者別当室風平家此中ゆい
元者乃ゆいしん山陰へ教白せりや中
上將軍よ小松の任者中將維風越前
之任乃登陸守忠度夫乃考知教從
馬守經政乃捷者經後約上將よ上徳高

判友忠徳亮彈乃室之判友京之乃ゆい
判友高京乃橋判友長徳任者此高京
氏任者此高京京之氏亮の之ら高京之國
長井此任者別当室風とゆいしん山陰
勢十万余高京乃ゆい四月十六日ゆい教と
小國へ教白せりしん山陰之
ゆいしん山陰乃用しり始てゆいしん山陰
控門勢ありしん山陰官物とゆいしん山陰
ゆいしん山陰之勢ありしん山陰之勢ありしん山陰

はらひたれきりあくと遊捕して多し
多し人氏集近あくと陣い幾あす
先い後沙米を以て玉出けの浦は満ちあり

經政より竹生信福

中より後陣出上將軍 皇后宮亮並
馬舟經政と凡管経れり達し女
人か勝くは存多しをり世に執る中
あまは者よ立御海くう海とと入後
悲切にこれ時をあまといやあふし家へ

あまといやあふし家へ
いよわらへ海くう人として竹安存
と始しんあし一侍大六人小舟に
彼海の中へ海くう侍志氣集ると人
し云集りし月日す以て七月十日
の事一たもとい初に初夜に
そとくし類を初吉原に
教へ告海の洞をい言れと
竹秦白皇太子男作女と
て不死の業

武皇目のつらあ事こそ不承あれと云
てん者の中中かよをのむうう大將軍
ゆんせきうのつらあ人か公川の行古
しうろ倒ゆの事と一旦山川と塞と
いれ入く足将たと去く梅と切
落と也新くあ行程も落る馬其
く究竟れあての氣も去せ也致
後矢よあてい任んすう作うりり
平泉寺の長吏蘇の威儀師うり致を

書ありうう平家不制候の致く平令
足将たと去く梅と切落と也致
うもいあや山川と一さあ行程たふ
落るうり平家志がりの事ゆめなり
十万余とち子梅と一分くそもれ
うの中や、俣力内、平泉の
長吏蘇の威儀師と勢と百金致と
日者平家志とさううう留控の
入る松林の六角光のよ入番文治史

田行色石置内田は志を防戦とて
勢多勢一町に移りて一井を
加賀王より退き白山より一井橋を引く
白山の内は折笠の平家續く加賀國
一札入富樂林は二ヶ所あり候御旗掛
てそよりゆきまゝの平家此の大将軍小
松の三佐乃中将惟盛早馬と立てて那
へは中へ入り入りしれい上馬久と始系
てく都く技ありゆり平家此所縁り

今て諫言り新事不察を引く平家此中
万金銀を大子揚子中分てその向きより
先んちよ此大将軍中へ小松の三佐中惟盛
戦前之伝通風を承る者教三人大将軍
少く都合して勝方七万金銀加賀勢中へ
懐不り碓波山へをいさむる揚子中
大将軍中へ薩摩の忠度但馬守の經政
乃使者の經後三人大将軍として都合を
勢三万金銀外産戦中此懐敵愾の平

へ搦りしころそ向きまされ中少く火打り
城よりいさう林の六島先的早馬と云く
本堂者へ下りあつていさうと云くいさう
火打り様とい半島事此書更其の儀儀
師より返り志ゆ候く念あつて破れいさ
しぬる平家と云候し破れいさといさ
い破中此廣く一打打り程あつていさ
此の事一々いさ一急考せし儀事と云り
あつたは本堂といさといさといさ
あつたは本堂といさといさといさ

目五百金候しと越後の國事といさ打
まうり本堂実いさういさ此出島事
此廣く一打打り程あつていさ合
我といさといさいさいさ軍といさ
勢り多しといさいさいさいさ
いさいさいさいさいさいさ
て此又の十島事いさいさ二百金候
と指割く徳光の儀いさいさ
いさいさ軍此指割いさいさ
作

考のまゝにして汝の定方金後と六百と
らうの先是利の夫田に判友代義法指
り六百親忠と七子金後とを別て小黒
梅を向くまうう仁科の梨と田の次島
毛と七子金後とを南黒梅へそ向く此
うの梅に北次島並光五子金後とを集
利物所へ置れ梅へ梅の子中とありり
根井の小赤と五子金後とを根長れ柳
原菜更れ木林と引く今井の安島

道平六子金後と七子金後とを公井海り
且此林に指れり木書に一万金後小
て黒板の山のまゝ親へありり
中島の森と陣とありり

本曾之礼書

本曾孫よ旗とて先とて先
旗とて先とて先とて先
割計は本曾へ黒板の峰と地付と
白旗とて先とて先とて先

りつて、そち
を付きて、遂に合戦とす。是より、人々
て、且、後代の事、且、南家、北家の
戦、書と一巻、ありて、曰く、ありて、
人々、馬、しり、かりて、書、し、す、
其、自、然、繫、果、の、か、ら、り、の、事、
成、り、獲、と、る、人、々、の、事、
有、り、と、事、の、事、の、事、
漢、書、の、事、の、事、の、事、
能、り

小観音身とあり、本曾う前、
院、と、書、と、く、教、子、其、是、と、
い、く、事、の、事、の、事、
飛、人、志、弘、と、勸、学、院、の、事、
中、心、の、事、の、事、の、事、
南、都、の、事、の、事、の、事、
井、寺、人、入、法、の、事、の、事、
其、也、傑、と、い、く、事、の、事、

揚雄使戎場忽三所和光之拜社壇
威純德大明也馬位殊戮金疑歡喜
渴作深所曾祖父前漢與古源義家
物良守附身於宗廟之氏族自号其
名八幡之島義家之集乃之門業者
不歸敬要仲者乃之後流傾首年久
今自心大切之譬如嬰世兒持貝測巨
海蝸蝦取芥而向流車難能為君
為困起之乃家乃身不起之志之也

神聖人之臨武場外喜亦伏而祈冥顯
加威冥神合力之勝於一時退怨四方
於一兆則卅祈叶冥為雄權可成加護
先一之令見瑞相於一

壽永二年五月十一日源義仲致曰

りて書ありり

俱利伽羅

木曾殿と始して十三人お名上矢は
と一は新書中別く大重薩乃の當前

落しつゝり 削しやせやせをてし云々
大勢の傾きつゝらわつた方々の人々を
すう稀あまの親かたを子に落し見
落せし才をけく自落せし家子郎等
と續くつゝりつゝり人々中つゝり
ありしつゝり せし程に指しあつた
平家此大勢七百余騎とてうめあり
いふまゝにや若く泉血と流し死骸
あすつゝりや終つゝり平家此大將軍維風通

威斗つゝりしつゝりき命あつたつゝり
川まゝに入るる事子孫の志を
新ぬ志を承るるつゝり 村を
首れを四つに碓氷の矢に
しつゝりあつたつゝり 中つゝり
人伴あつたつゝり 祐氏と
てやつゝり 教へしつゝり
五高の事つゝり 一高に
之傳此國の住人

寺の長吏母の威儀師と云本常生捕
めそそせしむるし潮もろ大島益康と
本常身魚はさうんたあふさうてか
此寺の役人病光はさうらぬ者なれ
あり平泉寺の長吏母の威儀師と云
本常り前といつて人悪し一法師と云
て抑せらまさうり其の生捕と云余
後が須さうりかげとせしと魚人奉の但
舟又十島病人の志よ一百万金積と云

割く懐のまへひあつる筆了と云
やめて人んとせや万金積の中言ふ言
金積と云具して筆此國のし漆と云ら
流るんと云竹者うう打言極指満く深と
浅と云と云つとさうらるめ本常坊定の謀
小勢と云る十上斗と云深ひと云て打色
大勢と云る人上と云又毎りさうまの勢凡
元らう福ふて向井の屋と海りけはた
浅りさうらるや海せやと云本常定

二万金部皆打入くそ流りて恒れ
行降く人あへんあつて十高懸人
軍一行もあつて退るるれ甚と休
所中本軍も二万金部と入るる教
くよとて責くまはるる平家本軍
の痛人責くはつてや思はれん
都々の國へ引退るるあつて藤原の
と捕る本軍も加賀の國へ入る
う藤原とて合戦す此は六月未
午此

刻斗此事やまはるる事いせりて
源平争ふ入部を我軍とて教
責戦りて通るる行ありて
初とてことす家とて平家とて
後とてより源氏とて二子余
り平家とての軍一行も
此くは成るる上とて

實感の寂期

家とて源氏の勢の中ゆきまらるる後
もた也

先登しど若葉しり日暮しりさう人
ありしと守り月ひあり光の然る角り
ありく若葉しどは世とさうのあす
しりあいのあんとて馬しりあ人しり
しりしり落し実登しりああしり痛
しりしりしりあしりしりしりしり
あまの終し平来う下はあしりしり
うり平来頃あしり本當方の四角しり
え感しりああしの曲志しりしりしり

氣ぬてしりしり將軍しりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
直登しりしりしりしりしりしりしりしり
此無角しりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
あしりしりしりしりしりしりしりしり
てまやあしりしりしりしりしりしり
越身しりしりしりしりしりしりしり
草しりしりしりしりしりしりしり

たふんとうろみ 髯 頰乃 雲 さらさら 髪 人
植 口の 浪 島 魚 光 占 年 来 代 傳 言 不 事 夫
人 急 ころころ 植 口の せ こと さま さま 植 口
い 頂 と 只 一 目 入 ころ 空 音 愧 毛 植 口
長 井 乃 母 友 別 處 實 登 ころ ころ ころ ころ
や 本 書 ころ ころ 贊 給 乃 雲 ころ ころ ころ ころ
い 布 きた 植 口の 浪 島 浪 ころ ころ ころ ころ
流 ころ ころ ころ ころ 植 口の 浪 島 浪 ころ ころ ころ ころ
人 ころ ころ ころ ころ 浪 島 浪 ころ ころ ころ ころ 不

是 浪 乃 せ 人 主 乃 也 ころ ころ ころ ころ ころ ころ
ころ ころ ころ ころ 浪 島 浪 ころ ころ ころ ころ ころ ころ
ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
六 十 一 乃 ころ ころ 軍 場 を 斬 人 可 乃 贊 給 頂
と 雲 々 浪 島 浪 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
輝 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
或 者 ころ ころ 人 乃 夢 如 主 人 之 際 ころ ころ ころ ころ
何 乃 人 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

より後、天平十五年十月、肥前國妻
津の郡ゆて、むかひ若草卒らう、國家
と親しんとして、時、口門の野、東人と大
將として、廣嗣進討のあはよき、さし、うら、そ
う、新のれ、お、お、始、く、伴勢へ、行、奉、終、り、
廣嗣討、して、後、主、と、並、言、く、常、と、
醍、と、事、お、お、か、り、者、ら、の、因、を、**天平**
十八年六月三日、日、後、前、國、の、並、れ、郡
右、宰、府、に、就、若、寺、賣、れ、倍、養、の、守、所、

少、南、教、の、玄、勝、僧、云、く、と、中、力、し、玄、勝、の
府、中、と、り、敬、白、の、後、打、り、つ、院、主、と
志、者、の、ゆ、俄、よ、空、界、日、曇、雷、怕、友、の、下
賣、れ、棟、を、跳、破、く、玄、勝、の、人、の、家、ら、う、全
く、頭、を、お、く、事、中、へ、入、れ、ら、う、醍、と、あ、ん
と、思、や、も、い、玄、勝、廣、嗣、と、相、伏、せ、ら、ま、
毎、り、ら、う、お、信、の、因、を、**天平十九年**正月十
五、日、午、の、刻、中、よ、直、福、寺、の、南、大、門、に、
あ、や、ま、く、ら、う、死、よ、玄、勝、と、玄、鑑、と、ら、い、く

女を例として括る此の初者として始まる

本曾山門之體状

同く六月八日日本曾とて幾前此國有
付く先と井植に箱根井とありて我
ホと交とに困と序とと上落と人
小削乃山門の大成平家と人として流く
幸もやあんと人并破くと人
よの屋と名まこと平家とと佐とと
あつと書ととあまきととまはとと成とと後

乃お中上落せ人兼仲う前後と向く合我
せん事か〜と二に幕物今〜也とと中
志赤お上事おれととわが井とぬる事
と云多れを定傍定的のりもろい山門と
三子お前後一赤月とよと〜と内と事
中志はあすう前後とわが井とぬる事
あ〜と幾と人〜とあ〜と人〜と
と〜と毎と〜と本書と〜と七種と體状と
是の書と〜と山門と〜と送と〜とと云

漢之義仲乃世傳而申上之信欲平家之
恩送之去保元平治以降永失人心之礼
雖此其後亦平細素載足志進運帝
位飽膏孫國郡不為乃理非理不嫌有
罪去罪追捕控門勢家損亡獨相持且
取其資財擢與身位沒收彼庄園恣
首子孫純平治治承三年十月壬申
法皇城而難言奉移轉陸於海西之純
城之度不言其治首加之回四年五

月一院才二之字子之入表文之打周朱
閣令致馬九重之紅老之天子為道
悲分之害竊入清之界之時其伴出
依期令旨欲企之系以歎死歎滿卷
豫乘失路之境之海氏打不系他况
我亦於之起飛之非純中國機依疑分限
令而動之赴行乃源之位相政入之於字法
橋柱令下重義難助一戰之功不克多
勢之黃惟教嚴か右岸者流性命也

長河浪平ナガカハナミ今旨イマニ之赴銘所シモキ同類トウリ之悲失シ
兔ウサギ因ヨシ五東イハ困コト山ヤマ圍ト之ニ源ヒナ氏ノ小秋コアキ企コト全ト志シ者ノ
其ソノ中ナカ者ノ仲ナカのノ達ト止セ止カ宿ヤク之ノ名ナ性セイ年ネン之ノ秋アキ揚ヨウ
旗ハタ取トル鈕ノボ如ニ任ニ別ニ日ヒ越コ後ノ困コト任ニ人ヒト依ヨ西セ高タカ長ナガ
持テ牽ヒ數ス萬マン之ノ兵ヘイ年ネン令ニ教ケ向ム召メ者ノ仲ナカ地チ向ム
橫ヨコ田タ川カハ系ケイ為シ合カ我ガ者ノ仲ナカ僅ヒ三サン千セン之ノ兵ヘイ
破ツ彼レ二ニ萬マン之ノ軍クン兵ヘイ年ネン抗カ而シ風フウ中ナカ力リキ且カ廣ヒロ
重オモシ之ノ平ヘイ氏ノ之ノ大オホ將シヤウ率ソウ十ジュウ萬マン之ノ兵ヘイ年ネン終シユウ尚ナカ小コ
陸リク不レ越コ弱ニ賀カ別ニ姓セイ別ニ破ツ彼レ軍クン置キ恆コト恆コト以テ發ハツ矣ヤ

隆リウ東トウ以下以下之ノ城シヤウ部フ及ツ數ス之ノ度タク之ノ合カ戰セ迴ヒ
策セツ之ノ惟ヒ幕マク中ナカ得トク勝シユウ也ヤ起キ人ヒト之ノ下モト討トル必ズ伏フツ
攻セウ必ズ降クワン碎ソク之ノ秋アキ以テ不レ失ス破ツ芭ハ蕉コウ相シヤウ同トウ
冬トウ長ナガ枯コ祥シヤウ葉エフ葉エフ也ヤ北キタ者ノ仲ナカ也ヤ昭シヤウ海カイ神シヤウ明メイ
弘コウ池チ也ヤ平ヘイ氏ノ既シ敗セ小コ之ノ上ウヘ破ツ企コト志シ洛ラク
者ノ也ヤ之ノ鐘シユウ數ス萬マン之ノ禁キン正テイ可ク入ニ洛ラク陽ヤウ之ノ衢コ
也ヤ至シ之ノ時トキ霜シユウ有リ疑ギ賊タク其ノ故コト也ヤ何ナニ志シ抑ヨク
天台テウタイ之ノ千セン之ノ後ノ日ヒ源ヒナ氏ノ之ノ力リキ年ネン家カ
冬トウ若ニ可ク之ノ助シュ也ヤ思シ後ノ志シ向ム而シ後ノ可ク合カ我ガ

乃及合我法教其滅亡不可回踵非哉
平家幸甚震懼奉亡佛法名其舞之
逆起美兵每忽向三千前法及之忽
之合我幸痛亦在揮醫王山王合
遲留行程去為初庭緩急之良賊哉
畧那程之毀迷進退如公案內存
平家度集之千之院為初為佛
君為國月之深氏七年平家活為化不
耐能丹之玉義仲悲懼極云

長承二年六月日

進上惠光院律師山房に之書

山門之返牒

平家山門とは由成世に之と或は深氏
其回公せんと云云前法くも之或は平家
与力せんとも云云前法くも之或は平家
乃平家あり我亦いひ祈し金福聖王天長
代久し祈り奉り之と或は平家あり
代其の如く山門は之と或は平家あり

廻奇謀而起義兵其方未已去年其
名既施七道之國家の景家感其功感
或畧夫吾山之前後且以兼收必代其
上精利收不空之妙内之惠權知至意
前後亦人中其意實家亦自寺地寺事
任之佛法本社未社祭費之神明之祝
教法之兼業宗敬之復舊而定法
行免其者又の醫王善逝之使者お加
馬賊逃討之勇士頭者又二千之役將
其

字領作之管令杖惠信治符之官軍出觀
十系之禁風者拂好信和物之木楡伽
三密之法兩帰時俗於竟年之舊流
後之金襴必代信家之

長永二年六月日大元宗

平家之門十余人是若之社連暑之
毛中塔之津成之一陣既之
平家之

教之并ちる葺懐と合りる行宮にたもてい
修く母夫らうしつるむうしんはと南家ひあわ
て不忠とるせす南家い又しんはあひて怨
とじととい神人日昔社へ連暑者教書と書
幸しくと子れを後と修くしんはと一門十
余人連暑者教書と書く日昔社へしを送
らまきとれと教書よえ敬回す

日昔之社定く成神而修曆寺号成集
可作一向天台く仏法と文

右書家一族之業殊有初推旨主教山者
桓茂天皇清寧丁未師入唐歸約之海四明
之教法弘く前其内侍給舍那之大戒於
宋永力佛法敏學昌之冥婦專佐鎮護
國家く之乃協家伴臣國強人前不業者
控依頼物不悔身之各却而物朝要加之
与其好謀政同公深氏小行亦事伴山下
緒夢之有教近信を信也外教國去宣云
真令神領万物目茲且進日象代勳功

致且任高時乃馬之氣速可進村賊位
由苟命頻企遊得家與鱗焉
翼之陣官軍不得利星旄電戟威逆
類似系勝之非神明備池之如由何日鎮叛
逆之凶札惟之作一向天台之佛法傳特
日者神見而已何況長等憶晨祀柔可
得本願余之商孫可宗敬孫可來敬傳
以子孫承不失法自今已後山門有聲
一門之社家亦有慎者為一家之慎社者

付惡共成茲同抱愁在氏又之宗春日社
真福寺氏神氏寺久歸依法如大宗教
當家又歸教日吉社延曆寺氏神氏寺新
值遇矣實頓悟之教彼者昔遺跡也為
君思本業是者今精行之乃家頻結地
尉之作行者山王七社王子眷屬東西滿山
護法聖前十二上願日光月光護國王善
逝十二神將各照靈二之冊誠靈唯一之
驗庶然則於法逆心之賊來平於軍門

暴逆殘害^{カウキヤン}之北軍殘骸^{ノコセシタカマラ}於^{ケイ}東去我未^カ息^イ歟
仙神^{シラマヤ}豈^シ控^シ外^シ仍^シ由^シ家^シ一族^シ之^シ害^シ是^シ也^シ同
喜^ニ作^ル礼^ヲ祈^フ精^ヲ如^ク也^シ 後^ニ位^ニ行^ハ右^ニ近^ク清^ク
中^ニ將^ニ魚^ノ領^ヲ波^ヲ也^シ平^ニ資^ニ成^ル盛^ル朝^ト長^ク 後^ニ位^ニ行^ハ
中^ニ高^ニ檢^ニ中^ニ將^ニ魚^ノ越^ル前^ニ也^シ平^ニ朝^ト長^ク通^ル盜^ル
正^ニ位^ニ行^ハ左^ニ近^ク清^ク中^ニ將^ニ魚^ノ伴^ヲ也^シ平^ニ朝^ト長^ク維^ル風^ル
正^ニ位^ニ行^ハ左^ニ近^ク清^ク中^ニ將^ニ魚^ノ播^ル權^ヲ也^シ平^ニ朝^ト長^ク重^ル風^ル
正^ニ位^ニ行^ハ左^ニ近^ク清^ク中^ニ將^ニ魚^ノ也^シ平^ニ朝^ト長^ク清^ク宗^ト
卷^ニ後^ニ正^ニ位^ニ行^ハ自^ラ大^ニ后^ニ宮^ニ修^ル理^ヲ控^ル事^ヲ也^シ加^ル賀^ル

越中守平^ノ物^ノ以^テ統^ル威^ヲ征^ル夷^ヲ大^ニ將^ニ軍^ニ位^ニ三^ニ位^ニ行^ハ控^ル中^ニ
細^ク云^フ無^クた^シ也^シ平^ニ朝^ト長^ク知^ル威^ヲ從^ル二^ニ位^ニ行^ハ權^ヲ中^ニ納^ル言^ハ
兼^テ肥^テ前^ニ守^ル平^ノ物^ノ以^テ教^ル威^ヲ二^ニ位^ニ行^ハ權^ヲ大^ニ納^ル言^ハ
兼^テ左^ニ近^ク清^ク平^ノ物^ノ以^テ時^ヲ忠^ク二^ニ位^ニ行^ハ權^ヲ大^ニ納^ル言^ハ
兼^テ右^ニ近^ク清^ク奧^ニ也^シ按^テ察^ル使^ル平^ノ物^ノ以^テ損^ル益^ヲ二^ニ位^ニ前^ニ内^ニ
大臣^ノ平^ノ物^ノ以^テ宗^ト威^ヲ敬^ル日^ト

壽永貳年六月の日
謹謹上座主僧云々書^ル也^シ
主上之御座

名と山王天師名と書せ討いて日三千七火命
かと合しし也中其目非後舞神ありて遠
人望あり背あり後麻と大元とてありめ
と名と馬とて中其目非後舞神ありて遠
去と今更千代と書し人とて物とて也牒也
及中中て肥後も貞徳鎮西に謀殺平けけ
苗地へは杉浦景之と子金務と討具して日青
十日を戦ふと名鎮西に大園山園に未静とてや
らまらるる内也中其目非後舞神ありて遠
大

此と打せとて中其目非後舞神ありて遠
常と名資賦雜具と東西へ運送と明と後
中ししと美濃源氏に依後乃軍討守後と
志と名もいと中其目非後舞神ありて遠
中軍は負とて中其目非後舞神ありて遠
て搦とて中其目非後舞神ありて遠
一門の源氏と名西と中其目非後舞神ありて遠
ゆと中其目非後舞神ありて遠
と中其目非後舞神ありて遠

五万余騎の勢めて東佐布ゆみりて人
とて安くはば千指の志を執忠を傷
覚的天台して慈らりお杉院と御佛と
し七山儒も元とらりし如く既く教へ執入
いそやとすり身り者も平家ありて是
と防やとて大將軍といはる御持念國中
と位に中將を御二人大將軍とて教合を
勢二千余騎と御と防とて向きより
薩摩も忠度佐馬守御政も使ちる薩摩と

人大將軍とて教合を御とて白余騎御
平とて向きより勢前此に征進國姓登
も教合三人大將軍とて教合を御一千
余騎を御と防とて向きより去程とて高
勢人行御一万余騎を御とて御とて
入とて向きより足利も御とて判費代義
清六千余騎とて丹波國より大江山と
河内源氏も御とて御とて御とて
御河内源氏も御とて御とて御とて

子親も入りしを家しより平家さしとい都
ろくしらめく了そ巻を角也なりんす
ましつへ平家呼也せして字治部同巻
とて皆ふいそせとさしりて寺教名利の地
鶏鳴く易く筆ねり治まらるるを
くはくも境や親もくら母とありそと
吉野の山の奥のわくへ入るをとい国名
もれ其法園七石志く破まゆ一と
ろくろ親くわく入るに東を女猶如火宅

如来と金云一葉乃抄文不まきとい形
わくゆらるるといと共らるのとい来つけし
小大は教女院乃流を抄むらうり六波羅院
へまのせ抄くりて抄者ありい世名中一
る極いとといやうりあそそ人々とい
内中く巻く角も如くもけと家人と
由れありりんてかうまめはんを氣とせん
幸更の可んそやかまとい元と由と如と
の筆也行筆とて西園れりといと如と

平大由之時忠為の少方師の佐敷を
少月與荒のまゝ来りまじり中少く平大由之
時忠の心く神金賣切内侍平大由之
の簡大由之ケ言家鈴鹿と成りまじり
丸せし年く下知せりまじり世伴之周
章て丸落すおの常りり平大由之
時忠内侍及佐基撰述の中將時實父子
三人計こして衣冠多志りして行幸ま
倍奉りまじり下大由之教と始なり

平大由之の依りまじり甲曹と鑑
弓箭と帯して倍奉りまじり七條と
西へ朱雀もも入行幸也及此相物
少平也去程漢天既用く言東順
中継とめめ此月白く牙籠又同志
一年教遷とて俄上國弟のりりす
大い名り人き前表たととととと

間
標の形と平家此所算り心此字れ

方へ落行人いほくまれも川具く舟久
も進とも及ふも新わ待り進て平らふ
こわらんまもここかふし又われ少あり
りのたとり具しこつ眼目と足足もいん
登あましこんあとき時り也あ又いつれ
浦中あも心あふ落付らうて進りり全
途こま久し能推感又比世ふあり者と
ゆらりとあふれ心移うとく人あをうす
らあし人ふもあてええあともあをん
あ乃かさあに老ともともこいん
あふべし世れつ子のあひあれえ

情とけきり人あしうい大くゆ夫あん
と原りしよ鏡へともあ山小中菟角
此世事進志新りす月加壽とんそ位進る
之位乃中将既く斬んと志は人の山小之産
此神と趣て教よい父てわ母もあ柱
まききくそわい又能とる人あをり
あをらん人中しんあよあんと形かこん
ううあしこれ日たのんう清うあ原うよ
あを新行へあまて金進すゆうたのこ

あはれおこしあこし考へたるあきりゆ泉をたを
菟角誘人並んと作らつる作し中不
此連糸と云ひしゆ人を激し咽く人先
又後の人と云は皆鏝の社とて露されあり
家と云は住れ作し神森又神森とて先
十九才十七と云はあり是れをわら五北
園加賀生とて神死と云あり神此神
別当重盛とて子中と云は三任の馬七寸
五分七寸と云はしとてまんとてあるん

とりもまといと任の申物然世ホといふは
あつとん苗とて又あはれ代つとて
可和忠高者と苗れと家へ福力力
涙と揮とく苗とてよりと任の申將殿と打
中針の小中口此とて程とて情ありとて
人とい露ありとて考へるあつとん人の
中とて將とて十四屋のまといとたとれし
とあおととたつとてまろりあつとて
中屋のあつとんとては任ありとてあつと

の金の口わきとて実しきむらに位は
将んはくく徳人とてさうらうに打撃
おれらるるを指うるゆへにすめを厚り給
ふすは人あつて人をもつらうてむ人
そはさうらう人あつては此の時のゆは
必仰りて兼とてたれと定置らうや
あつていふやれきさうに況やふい
まは浪りあつていふに別はたはれ
留りてはさういふあつていふあつていふ

姫君は位多しきうあつて此道の身は位
まらぬとてなすは格のるは内立上計
之甲指上平と思ひまはせんと
しきうに際し西一の宗代中火多り
なすは計角てむ人きとてさすは
これと思はれりあつてり者まとい
甲実あつていふと姫君は位多し
一丁車中あつていふと宗代は位多し
まといはれりあつていふと宗代は位多し

幾有為重業操と知りて命を惜みざる
事定むれば悔いなきとや美談の美談と云く門
と権徳門と符符事いして甲斐守とそ人なりあり

源政と都落

中少六条の源理重経威の子具皇名父元兼位
馬守経政の幼少より仁智寺に坐せしむるに
長門の人の長生とて我と給都とて仁智寺に
へそありしよりそ身勅勤の人とて内府をたてたり
宗のあります人として事たしめんとあり

あまの文ありて可苦とてなもてと作事
は源政の弟とありて長り漢とて
ありて幼少にありては長上とて
て思身とありて長り長りありて
まゝに可も事いしありて
一門ありて後上後上ありて
小漂落人とありてありて
ゆりありてまゝありて
この年より下ありてありて

片町之助 一とて百知の冠 一とて今五
田舎に藤の中 一人 茶の海に座り 見らるる
さきん 事之 作りよ 掃り 人 先也
並し 糸 せり 也 糸 糸 糸 糸 糸 糸
元 教 人 也 下り 上り 下り 上り 下り 上り
下 形 下り 上り 一とて 竹安 在 府 上 必
り 一とて 書 録 の 袋 一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸
糸 一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸
一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸

あまのい 文 一とて 一とて 一とて

あし 一とて 七 別 一とて 糸 一とて 糸 一とて 糸
海 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて

経政 糸 一とて 糸 一とて 糸 一とて

美作 糸 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて
竹 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて

一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて
一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて
一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて 一とて

室のこゆりて約きり約二張之張
只後十張并者皆其律律の程ふ
百張斗ゆ成く桂川の行とくゆり
和ぬかのこゆりて約きり約二張之張
中筋人の江段の程ふ達一丈
雲勝く程ふゆりて約きり約二張之張
まゆりて約きり約二張之張
幾行ゆりて約きり約二張之張
ころ重宝ゆりて約きり約二張之張

嘉祥三年ゆりて約きり約二張之張
珠冠の精士盧妻まゆりて約きり約二張之張
七帰物のゆりて約きり約二張之張
面の珠冠をゆりて約きり約二張之張
とゆりて約きり約二張之張
ゆりて約きり約二張之張
ゆりて約きり約二張之張
ゆりて約きり約二張之張
ゆりて約きり約二張之張
ゆりて約きり約二張之張

四幸此秋乃幸一門法淨教の月此宴
少して格玄象とありといふ者ありゆゑ
秋中此新月白く河頂より涼風来り
夜よりきし死人一人下りて唱方とゆ
志く休むは門の法に候りてあれは
思ふは秘の世に流るは如きと作者
まこと被化人老の大唐此琵琶の精
夫と申すも如く揚りて貞敏入唐と
之曲と傳へし今一曲と行きて傳へり

志か傳へし魔石の落る沈淪す今如こ
とを伝へしは門の法に候りてあれは
しりては秘の世に流るは如きと作者
授きし魔石の苦と道人の
此前より伝へしは秘の世に流るは如き
しりては秘の世に流るは如きと作者
秘の世に流るは如きと作者
秘の世に流るは如きと作者

成るや世の光とて懐しり春おひさる丸
お後成つよまらう用く見多人い百首の
方とそくまきあう三信とゆさうめぬ
あ事といりあうかお志利の中ゆ
思ひ忘るあゆんうこそおとまを那あ
志久勅撰とよあうい愚身形りる珠
略とあうあううううううううううう
序序あう石新甚い多毛くしといおんり
骸と曝とといさう也表表あうあうあうあう

沈め今生ゆ田つとく事いさうす維は世
別事とて只今いりうとてあ表事世うとと
ろろす一仏浄去ぬ海と多あうあう也え
志あうあうあうとととととととととととと
之信とあうとととととととととととととと
見送り候と押へく入あうあうあうあうあう
以前ととととととととととととととととと
うあうあうあうあうあうあうあうあうあう
あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

落しきり叶お志なきはあつしお前く
て前途程をど思控原ふく書き
雲しこりし中流せられしりりり
少を殊しすしりりりりりりりりり
し思しししししししししししし
実し世静し後文活の比執撰れ少活
るしとれ千載集是也千中中流集
方一首を入すましりりりりりりり
較あり入るやし思道道多れ其多執

の人とては存多きも然若字とて類し
後人志すすししししししししし
題とつし後述多ありし方也
内は借金志集れ初いあましりりり
ひりりりりりりりりりりりりり
まはる執却の人とてりりりりりり
事其也し程と小妻の之後れ中將
惟國兄弟大後打つましりりりりり
百金後作りたりりりりりりりりり

ひあつくましく作可し灰燼とる運り况馬位
う屋舎しあつてとや况や雜人の蓬草ま
とそととや餘煙の月人而をて板十
町也強突亡て荆棘を妬種基し弱
墓もあり果秦表く鬼攘あり感陽
宮乃焼淨くあり漢家れ三千六百其
内項羽うあつてと人多くもゆゑなり
そんそく目比い函者二清のさくしん
くくくく大山秋のおめ毛と解れ法

河涇渭の深きとをりんく丹東夷のあ
よきとそくれあり置んくりまや忽し秋
れ邦と夷らあて信し金智れ怪あ勇を
とせんともあつていそれとめとぬとく
神武ありしと目い舞ああつて氷と
矢指真あり國表撃撃とせすしと目
前とあり能くもと北ままうん惟元平
治の昔い平あひまれ花と棠くく成永二平
あつて又秋のゆきあつて落つてそのそは秋

つひより東國の天君の島守の重
徳才小山向の村有重守教民は
物徳をたのむ治業はしり囚人と
ゆゑより大に守れとせしむる人
うんと勿んと守いと平大ゆゑ
中ゆゑなりと守れとせしむる人
教をたのむと守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人
東國の島守の村有重守教民は

丁より西を移して東より人共程と相て助け
とせしむる人守れとせしむる人
ふといなり守れとせしむる人
て物業はしり守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人
守れとせしむる人守れとせしむる人

南まてく家へ借来不及力後氏押へて留
りたりとしい廿余年平の至ありき
りこそる後傍りりもめ平家いし山崎
戸北院中へ玉れ興いと昇て男山
とくかろく南を物有礼八傷大を産
主とと初をく我も成らて友部へ也
入とせ新へしり也新へを意成落初平家
と相しそ先示内大臣宗盛遠將法宗
平大ゆえ時忠平中ゆえ教登初中ゆえ知風

修理全経盛中平重衡小松平中將
維盛越前之位通盛新之位中將資盛殿上
人中内藏死信基讚法中將時実若部
か捕政明た馬死行盛た中ね法原初也
物と風丹後竹屋忠房産摩古忠交徳
ち経及も授ち経俊法路古法房尾徳
守法定修登守教経律中古師盛身死
古知孝死人な史業成全史初盛僧徳
と二位僧純専真法勝古執行徳圓中

ゆえに律師忠枝經壽坊に附梨祐也
少と源重実の判友季貞松律判友國隆橋
内藤季安在由若清季國と出んとし
一門百六十三人宗院の傳三百余人
其勢七子季人是ホいふ二ころ年うも
東國小國多の軍中村洩を以て終
少の亦也中中、小妻此之後の中將能藏
乃知いふ所か始をいへる皆書いと引
てそ下ら進ううそ和次も此者長い後書

其期と云うはまの皆打控くそ下あり
或は年比日來れうそ下いふ忘へるされは
行し留し只後とれんゆりんそくそ人
進く厚くそり各後とせり人新へん
黒松天と満くそり中か、薩摩の忠度
んうねりままのそ舟一別くそ進は
りしそありとられおの舟
修理寺經藏
古里と結ゆそそゆらん

倭樹とて之信ホ一と成く既と部(執
入)五々を都(ゆ)とて卷十(十)角(角)と成(成)之(之)
と室(室)人(人)世(世)親(親)の(の)人(人)と(と)信(信)目(目)と(と)人(人)を(を)知(知)也(也)
ひ(ひ)年(年)を(を)名(名)る(る)人(人)を(を)や(や)不(不)ま(ま)さ(さ)し(し)て(て)由(由)と(と)成(成)也(也)
西(西)国(国)の(の)人(人)と(と)が(が)人(人)ま(ま)と(と)て(て)を(を)あ(あ)ま(ま)し(し)
室(室)人(人)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)
也(也)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)百(百)余(余)段(段)と(と)門(門)と(と)も(も)も(も)れ(れ)る(る)人(人)と(と)
う(う)り(り)西(西)八(八)條(條)の(の)橋(橋)に(に)て(て)人(人)幕(幕)を(を)了(了)す(す)と(と)也(也)
一(一)来(来)室(室)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)

至(至)二(二)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
や(や)田(田)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
や(や)小(小)杉(杉)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
河(河)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
多(多)く(く)中(中)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
治(治)業(業)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)
毎(毎)日(日)の(の)人(人)と(と)自(自)然(然)の(の)人(人)と(と)あ(あ)ま(ま)し(し)る(る)人(人)と(と)平(平)家(家)の(の)人(人)と(と)

市新秋の始り月の下なりとも也
松林静めて揺寝の床に草花露
涙と輝く佳物のそと悲しき
世に神の故入る相國の物りとも
喜ぶ初んと思はれぬ
秋の月とる後のさる傷久二階
の接あふる雲人の心直れり
家五糸の曲と園隈のわく
序まきし里内裏何鹿と年よ意ん

て秋の菊門と田田若ら
松生恒と考えり
王松門のや通人
七月陰りそそ入る
と始りく平家
ほろむらり秋と
乞も後夜
と初幸よ
西幸十の未

享和二年七月廿五日卯刻
手家郡と落とてぬ

手家郡和給巻第七

慶長八年癸卯十二月八日

御筆檢校印付

乃師友

與村家故何君

德亦不詳

年

六月八日

